

●図表6・1 パーテンによる「遊びの分類」

遊びの種類・状態	内容
何もしていない行動	目的や意図をもたずに、ぶらぶらしたり、興味あるものを見たりなど、集団内で何もしていない状態。本来の遊びの段階に進む前で、いろいろな刺激を吸収している状態と言える。
一人遊び	明らかな遊びの状態であるが、自分一人だけで遊ぶ状態。他の子どもへの関心がみられず、独り言を言いながら遊んでいることもある。2歳～2歳半ごろに多くみられ、成長とともに減少していく。
傍観的行動	ほかで遊んでいる子どもの様子をそばに行って見ている状態。その遊びに参加しようとはしないが、遊んでいる子どもには話しかけるなどの行動がみられることがある。他の子どもへの関心が向き始める段階。2歳半～3歳ごろにみられる。
平行遊び	ほかの子どもの近くで同じような遊びをする状態であるが、一緒にその遊びを展開することはない。両者間の交流はみられず、同様の遊びをそれぞれ独立して行っている段階。2～3歳にかけてよくみられる。
連合遊び	複数の子どもが同じ遊びを一緒に行う状態で、他の子どもとの間に交流がみられる。道具の貸し借りや会話はみられるが、同じ遊びをヨコのつながりをもって行っている段階で、明確な役割分担はみられない。4～5歳でよくみられる。
協同遊び	一つの遊びを子どもたちが相互に関わり合いながら進めていく段階。役割分担や遊びのルールなどが明確に存在し、それにともなう社会的行動を含んだ組織的な遊びに発展する。4～5歳ごろになると急激に増えてくる。

出典：松本峰雄監修・大野雄子・小池庸生・小林玄・前川洋子『保育の心理学演習ブック』ミネルバ書房、2016年、56頁を一部改変



●図表6・6 けんかの対応の例

【おもちゃを取られた子が、取った子を叩いてしまってけんかになった場合】

①まずは両者を分けて、別々に一人ずつ話を聞く

2人の保育者がそれぞれの子どもの話を聞くのが望ましいが、1人の保育者で対応する場合は、「より興奮しているほうの子ども」の話を聞く。

②「どうしたの？」とけんかについて聞く

このときにけっして怒ったりしないようにする。子どもはただでさえけんかをしてしまって落ち込んでいる。嘘をつくかもしれないが、それを聞いただす必要もない。子どもが嘘をつくのは自分が悪いと思っているからである。

③その子の気持ちを受け止める

「そっか、おもちゃ取られてくれやしくて叩いたんだね」などと、子どもの気持ちに寄り添ってあげるとよい。ここでも叱る必要はない。

④相手の気持ちを想像させる

「叩かれたあの子はどんな気持ちになってると思う？」などと、けんか相手の気持ちを想像させるとよい。

⑤正しい対応を考えさせる

この場合だと、「おもちゃを取られた場合」の正しい対応を考えさせる。「けんかにならないためにはどうすればよかったと思う？」と聞くとよい。もし子どもが、「叩かないで先生に言えばよかったと思う」などそうすべきだった対応を言えたら、「そうだね、よくわかってえらいね」と褒める。もし子どもが考えを言えなければ、「先生は○○するとよいと思うなあ」などと子どもに考えるヒントを与える。

⑥約束させる

正しい対応が言えたり、保育者が教えたうえで考えたりして納得することができたら、「じゃあ今度はちゃんとできる？」と次はその対応をすることについて約束させる。もし約束できたら、また褒める。

⑦最後に握手

1人の保育者で2人の子どもに対応する場合は、②～⑥の対応を、もう一人の子どもにも行う。最後は、握手をするのが筆者の経験上一番うまくまとまることが多い。握手する子どもの顔は恥ずかしそうで誇らしそうな、何ともいえない素敵なかたちになる。このとき謝るか謝らないかはあまり重要ではないが、子どもが自主的にお互いに「ごめんね」と言うことも少なくない。片方の子が謝ったのにもう片方の子が謝らなかったら無理に謝らせずに、「ほら、謝ってくれたよ、どうする？」といった促し方をするとよい。